



水車

白い水彩の一筆描きを見たような気がして立ち止まり、川面に目を凝らす。細く伸びた黒い脚を水に浸して、コサギが佇んでいる。獲物を待ち構えて縮めた首元が、背筋の稜線を優美に際立たせる。

枝のように突き立ったコサギの脚は、流れが単純ではないことを知っている。回転流、螺旋流、二次流。川は二度と同じ形を止めることなく運動している。削られ、運ばれ続ける水底の土や砂。水はただ低きに流れるのではなく、うねり、くねり、複雑な力学作用を生みながら、土地に栄養をもたらし続けている。

勾配の落差が大きい場所を探せば、そこには必ず水車がある。麦を挽くのも川。大豆を絞るのも川。俺たちはただその流れに寄り添うように集い、家々を構え、暮らしを営んでいる。

静かな夜。遠くで軋む車輪の音に、水の気配を感じ続ける。